感　謝　の　言　葉

旧教員　望月　宏

大阪府立大学(旧・浪速大学)獣医(旧・家畜)病理学講座に縁深い皆様、本日、新年会に兼ねて私の傘寿を祝って頂き、御芳情に厚く御礼申し上げます。教職に在ったお陰で、師と呼んで下さるこの様に多くの友人に恵まれ、身の幸せに嬉しさで一杯です。試行錯誤の年月でしたから、錯誤の折りに遭遇した方達には取り分け迷惑をかけたことでしょう。教師の道に慣れない頃の未熟さ、慣れてからのマンネリズム、それにも拘わらず、学生であった皆さんは、それぞれの特性を発揮してテーマと取り組み、獣医病理学・寄生虫学を修練されました。その間、森田平治郎先生・一色於菟四郎先生はじめ多くの先輩・同僚の先生方から有難い御指導を賜り、また学生諸君の直接の指導には教室員であった冨村保・岡武哲・寺内淳・小田切美晴・釆原兄忠・小谷猛夫・杉山広の方々が、実に熱心に当たって下さいました。ニューカッスル病・鶏伝染性喉頭気管炎などの感染実験、或いは遠近の河川にてのカニの採集、肺吸虫感染実験に青春の情熱を燃やした方も少なくないことでしょう。

病理学の研究に欠かせない勤勉・着実・綿密な性格、並びに優れた学識・技術を兼ね備えた上記の諸先生並びに教室員の方々の御協力と、当時の学生諸君の溢れるばかりの向学心に支えられて、私自身も大いに探求心を満たし得ました。昭和47年5月から8月、私は胃潰瘍のため入院し、講座の方々・学生諸君に大層ご迷惑を掛けました。その折り、獣医学科の学生諸君に献血して頂き、今も感謝して居ります。昭和58年3月退職の際には皆様から身に余る御厚情を賜りました。同年5月7日の祝賀会の忘れ難い思いに、17年後の今日、また新たな感慨が加わりました。

私の退職後は、堀内貞治先生・佐久間貞重先生が着任されて、小田切美春・小谷猛夫・杉山広・山手丈至・桑村充の方々と共に講座の充実・発展に尽力され、嬉しく存じます。

「教育の際、最も教えられるのは教師自身である」‥‥これが私の実感です。大学教育の大改革が国家規模で論じられる今日、大阪府立大学獣医学科が優れた獣医師を育てる学校として益々発展するよう期待し、併せて皆様がお仕事に御家庭に、心豊かな日々を送られるようお祈りする次第です。

＜回顧と感想１＞

大学を卒業した1942年から2000年に至る57年間の半ばを超えて、30年余り(1952～83年)私は大阪府立大学獣医学科に勤務しました。赴任したのは新制大学1期生卒業の半年前でした。翌1953年4月、それまで家畜病理学総論担当の森田平治郎先生が第2代農学部長に就任されたのに伴い、家畜病理学実習に加えて病理学総論を担当するよう命じられ、32期生(1984年卒)まで総論を講義しました。当初は小野豊先生著:家畜病理学総論(養賢堂)を教科書としましたが、その後、武田勝男先生著：新病理学総論(南山堂)を選びました。20世紀後半は医学・生物学が飛躍的に発展した時期、新知識を学生に伝えるには、しばしば改訂されるこの教科書は適切でした。他面、医学生用であるため家畜への言及に欠け、学生の不満は免れません。家畜の例証を上げるのに苦心しました。複写機が普及しない当時、謄写版のガリバン切りに追われ、森田先生から「君は小学校の先生のようだね」との後批評を頂戴しました。電子顕微鏡の導入に基づく細胞学の精緻化は退行性病変の内容に、微生物学・免疫学の飛躍的発展は炎症論の内容に革命を呼び起こし、また伴呂動物の高齢化、鶏白血病の多発は腫瘍学の、アカバネ病の流行、疾患モデル動物開発の気運は奇形学の重要性をもたらしました。新病理学総論を用い始めた2～3年は新知見を会得するため、下調べにかなりの時間が必要でした。獣医学と医学の基礎理論はほぼ共通し、従って後者の発展は前者のそれに資することが多く、また卒業後公衆衛生の分野で活躍する学生が少なくない事実を考えれば、人医学病理学総論教科書の選択は妥当であったと考えます。1955年大学院修士課程が設置され、その講義が加わりました。「学問には学部、大学院の区別はない」との信念から、大学院の講義で得た知識の多くを学部に下ろしたため、大学引用の新たな教材を作る必要が起こることもしばしばでした。

大動物病理解剖実習では、解剖術式や病変の説明には自信がありましたが、正確な解剖学用語について予

め復習するのが常でした。屠場臓器実習では臓器の運搬に、森井敏夫さんに大層ご苦労を掛けました。また焼却炉が無かった大仙学舎時代には、解剖した大動物埋没のため学生諸君にしょっちゅう大きな穴を掘って頂きましたが、木谷真三さんは腕時計を埋めて無くし気の毒でした。同君の天折は惜しまれてなりません。

病理組織学実習では、家畜衛生試験場勤務時に得た馬の日本脳炎の脳など伝染病診断に有用な組織標本の充実に意を用い、学生時代に受けた山本脩太郎先生の実習法を真似て実施しました。62～63年、西ドイツ・ハノーバー獣医大学に留学した際、病理組織学実習や屠場臓器実習の教授法が、私自身が学生時代受けた教育に酷似することに驚きました。

東京帝国大学初代の家畜病理学教授時重初熊先生あるいは恩師江本修先生が留学先のドイツの獣医学の吸収・同化に如何に熱心であられたかを、痛感したことでした。COHRS教授の講義には毎回多数の肉眼・組織病変カラースライドが映写され、充実した講義でした。同教授の御好意により多数のフィルムを複写させて頂き、帰国後講義に用いました。我が講座には冨村・岡・小田切・小谷ほか諸先生が作製された美しいスライドが多数蓄積され宝となっています。略図入りの剖検記事用紙は記事の作成時間を節約し、兼ねて初学者も病変を見逃すことなく観察する修練を積むことを目的として書式を定めました。たまに病理教室を訪ねた折、薬品棚の扉の古びた注意書きを懐かしく眺めます。毒・劇薬並びに病原微生物の保管には今後も万全を期すようお願いします。

＜回顧と感想２＞

1969年４月、獣医学科７講座が中百舌鳥キャンパスに移転しました（内科・外科・家畜病院は翌年８月）。18期の加藤道幸・谷口稔明、19期の西川（角道）篤子・杉谷順康・山脇平・西田正剛、修士課程の小谷猛夫・合田光昭・小倉基裕・武下政一の皆さんにも大奮闘して頂いて、無事引っ越しを終了することが出来ました。1926年（大正15年）、当時最新の施設として完成した大阪府立農学校以来のキャンパスに別れる際には、一抹の哀愁を覚えました。戦禍に耐えた本館は老朽化し、台風の予報を聞けば閉じない窓に横木をわたして針金で縛り付けたことなど、懐かしく思い出されます。

昭和27年夏、百舌鳥駅を経て初めて府大に来たおり、大仙陵の偉容に驚かされました。日本最大の古墳（面積では世界最大の王陵）の隣の大学、素晴らしいことでした。前方後円墳なる術語を初めて知り、また新聞の地方版に発掘関係の記事が珍しくないことから、この地域が古代史に囲まれた環境であることを実感しました。農学校が高等獣医学校・獣医畜産専門学校・農学部を経て女子大学に代わっても、1600年を経た大仙陵はびくともしません。日本国が亡びぬかぎり、100年後、200年後も厳存することでしょう。

薗守龍雄・柳谷岩雄・橋本善之・山内昭二・矢ヶ崎修・清水亮佑・高橋正憲・堀江牧夫・馬場威・山田一彦・石川尚明などの皆さん、また学生諸君と共に、バレーボールや草野球に興じたことが昨日のように想起されます。移転後この分この雰囲気は薄れました。

＜回顧と感想３＞

新しい中百舌鳥キャンパスは教育に研究に誠に快適でした。解剖室や実験動物室へ行く頻度は、そこへの距離の２乗に反比例するとの考えから、研究室は比較的人気のない１階を選び、また本館内にも小解剖室を設けました。移転当時いささか殺風景であった環境も緑化許画などの整備が進み、現在では見違えるように風格を備えてきました。忘れられないのは大学紛争です。この時代には国の内外で大きな出来事が相次ぎました。私自身の記憶を整理するため、史書に基づいて列挙します。

1968. 4. 4　黒人運動指導者キング牧師が暗殺される。
5. 3　パリ大学ナンテール分校で学生と警官隊が衝突、続いて五月革命。
6.15　東大医学部全学闘争委員会の学生が安田講堂を占拠。
8. 8　札幌医科大学で日本初の心臓移植。
8.20　ワルシャワ条約機構軍、チェコに侵攻（プラハの春挫折）
10.21　「国際反戦デー」の新宿市街戦、流血・放火に騒乱罪を適用。
10.31　中国共産党が国家主席劉少奇を除名・解任。
12.10　東京府中市の白バイ男。3億円強奪事件。
1969. 1.18　東大に機動隊が出動。19日、安田講堂の封鎖解除。
7.20　アポロ11号が月面着陸に成功。
8. 3　参議院本会議上程の「大学の運営に関する臨時措置法案」が成立。
11. 5　山梨県大菩薩峠で武闘訓練中の赤軍派53人を現行犯逮捕。
12.17　文部省が大学紛争白書を発表（紛争大学

は124校)。

1970. 3.14～ 9.13　万国博覧会EXPO70大阪で開催。

3.31　日航機「よど号」が赤軍派の9人にハイジャックされる。

6.23　日米安保条約が自動延長。全国で約77万人が安保闘争を展開。

9. 5　新潟大学椿教授がスモン病の原因に整腸剤キノホルムが関係と発表。

7日・厚生省がキノホルムの使用・販売中止を通達。

11.25　三島由紀夫らが市谷の陸上自衛隊東部方面総監部に乱入・割腹自殺。(私は丁度東京に出張中で、ショックを受けました)

1971. 6.17　沖縄返還協定に日米で同時調印。26年ぶりの祖国復帰が確定。

9.18　日清食品が「カップヌードル」発売。

大学紛争の最盛時、大学に寝泊まりして即席ラーメンのお世話になりましたが当時まだ「カップヌードル」はなかったのでした。それはさておき、私は農学部の補導委員長の責にあったので、学部長の平井重三先生(園芸学科)に従って全共闘の学生達との団交に当たりました。無作法で激しい言葉を口にする人も居て、癇に障ることがしばしばでした。その様なおり、平井先生は「私に任せなさい」と、穏やかな、しかし毅然として譲らない態度で、実に粘り強く見事に対処されました。先生は退官後、京都府北桑田郡美山町にて郷土の発展に尽くされつつ亡くなられました。私の最も尊敬する先輩の一人です。

経済学部の占拠などありましたが、諸大学の中では軽症に経過しました。しかし教員間に分科会が設けられて大学のあり方(教授会の組織・運営、学生参加、学内裁判等々)が延々と討議され、その結論が全学集会に諮られました。これらの論議に費やされたエネルギーと時間は莫大なものでした。一体あれは何だったのか、今も釈然としません。冷戦という難しい世界情勢、社会組織の制度疲労に加えて、第二次世界大戦直後に生まれた世代(いわゆる団塊の世代)が成人に達したという生物学的要因が潜んでいたのでしょうか。熱病にとりつかれたような時代、あの騒ぎが百倍、千倍になれば、革命騒動にまで至のでしょう。東大・京大・名大では、その後も何年か持続感染の状態にありました。

＜回顧と感想４＞

昭和50年代に入ると、懸案であった獣医学教育年限延長問題が具体化して、昭和52年５月27日に「獣医師法の一部を改正する法律案」が公布。これにより昭和53年４月の入学者から、いわゆる「修士積上げ方式」を実施することになりました。橋本善之教授から引き継いで、６年制対策委員長の任にありましたので、各講座から１名の委員と共に毎週委員会を開きました。小田原評定を避けるために選択肢方式を取り、毎回の結論を明示することに意を用いました。議論が沸騰する場面もありましたが、講座の利害を超えて協力して頂き、「獣医師法改正に伴う本学部獣医学教育整備の基本構想」が昭和52年６月９日の教授会で決定されました。この間、病理学講座の運営は教室員の方々に随分カバーして頂きました。昭和59年４月には、学部６年制が確立し、私の退職後には更に発展は進み、15講座への増講座、獣医学科別館・２号館の竣工が実現しました。この発展に御尽力・御支援を賜った学外・学内の方々に感謝の念を新たにします。

＜回顧と感想５＞

「年たけて　また越ゆべしと　思ひきや　命なりけり　小夜の中山」西行

佐藤義清(出家：23歳)保元の乱（西行39歳)平治の乱（42歳)平家滅亡（68歳)、源平の争乱を見つめつつ生きた西行の晩年(69歳の作、73歳にて死去)の感懐「命なりけり」には、大戦に敗れ世の有為転変を体験した者の心に通うものがあります。

＜回顧と感想６＞

生まれて父母に接して以来、幾人の方々と知り合いになったことでしょう。昨年末出した賀状は470通。亡くなられた方、音信の途絶えた方(大戦中ジャワのボゴールの獣医学研究所にて親しくしたインドネシアの友、抑留中ジャカルタの外港での仲仕仕事の仲間、留学中お世話になったドイツの方達等)を含めても、その数倍でしょうか。世界の総人口に比べれば、九牛の一毛です。極微の確率下に得た知己は誠に貴重です。470通の内、病理学講座関係が20％、他講座関係が15％、合計35％が府大獣医学科の卒業生です。宛名の方々のお顔を思い浮かべつつ賀状を書いていますと、「この方達に支えられて生きているのだ」という喜びが胸に溢れてきます。有難うございました。

＜追記＞

昨年12月に91歳になりました。感謝の気持ちは今も変りありません。31年間努めた懐かしい大阪府立大学獣医学科の一層の発展を心より祈って居ります。